

令和2年度(2020年度) 研究員派遣による学校支援に関する研究(国語科)

自ら学びをつなげることができる児童の姿を目指す 小学校国語科の授業づくり

－「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項を相互に関連させた指導の工夫－

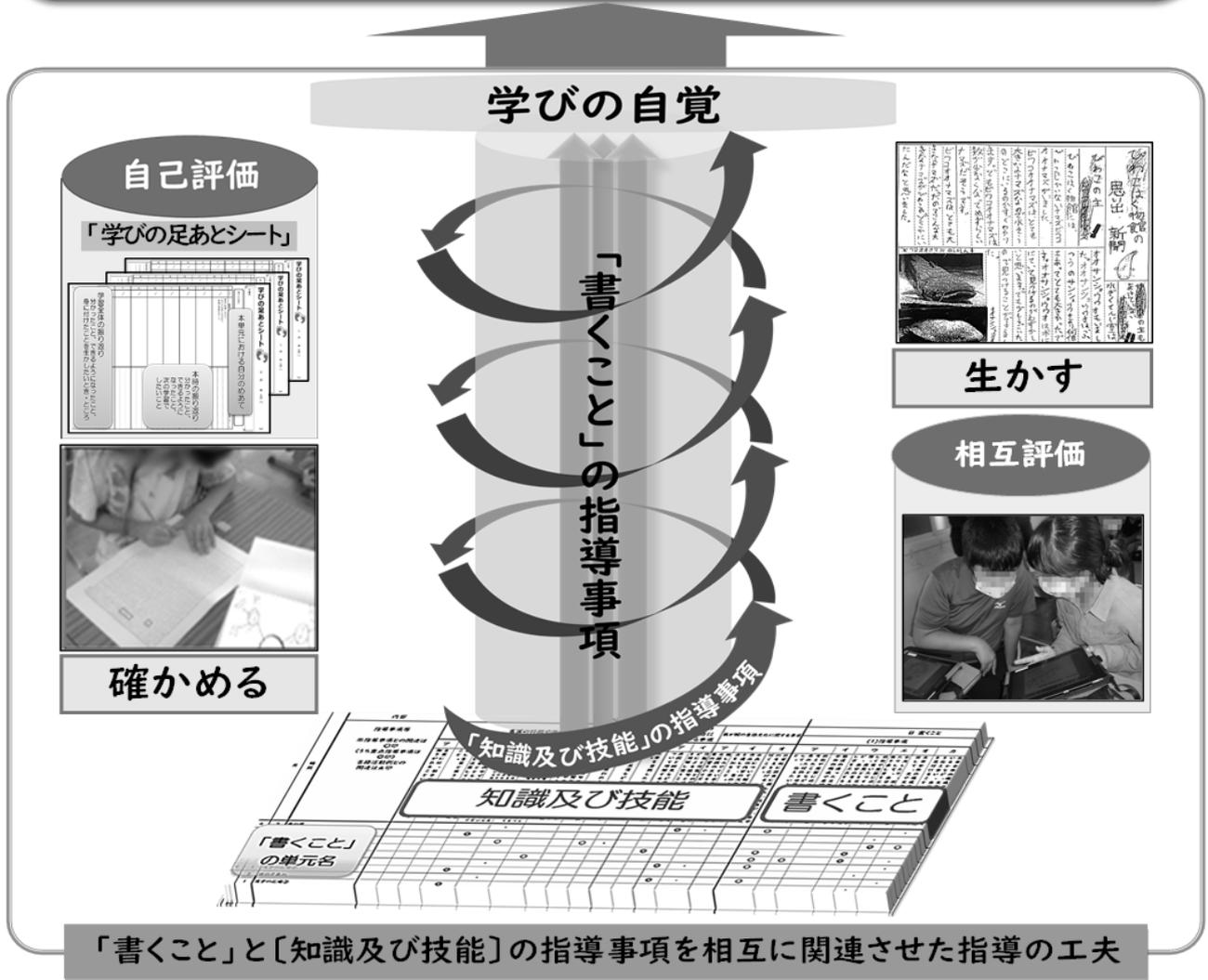
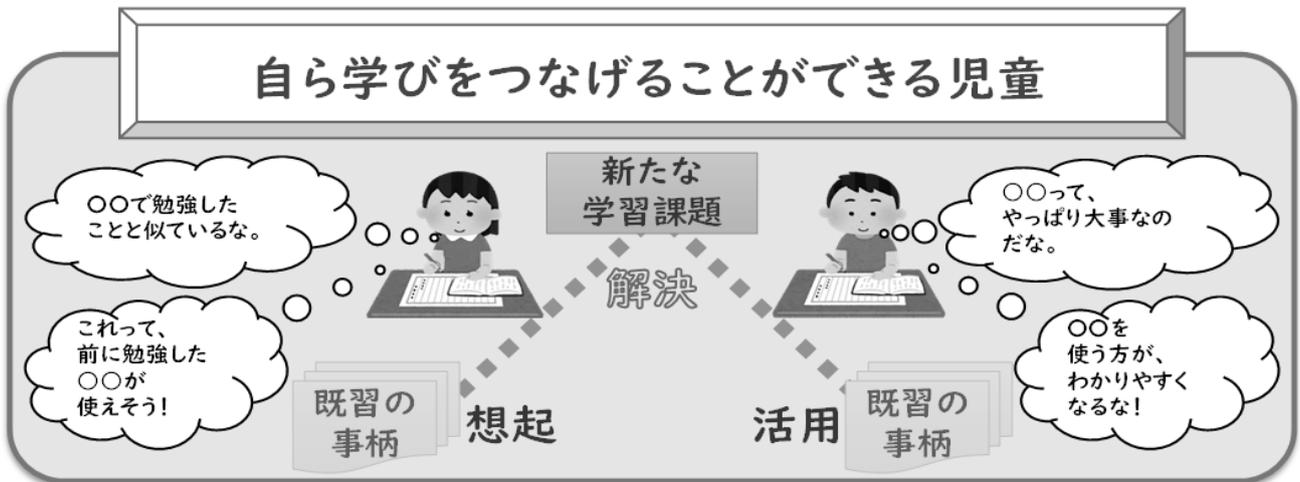
内容の要約

小学校学習指導要領(平成29年告示)において、国語科の〔知識及び技能〕の各指導事項は、〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項との関連を図りながら指導することを基本とすると示されている。そこで本研究では、研究協力校の指導者と協働で、年間を見通して単元の位置付けや育成を目指す資質・能力を明確にし、「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項を相互に関連させて単元構想を行った。また、児童が学んだことを他の単元においても活用できるように指導を工夫した。このような授業づくりに取り組むことにより、児童は学びを自覚し、自ら学びをつなげることができた。

キーワード

自ら学びをつなげる 「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項 相互に関連させる
 年間を見通した単元の位置付け 他の単元においても活用できる 学びの自覚

目		次	
I	主題設定の理由	(1)	VI 研究の内容とその成果 (5)
II	研究の目標	(1)	1 学びをつなぐ単元構想 (5)
III	研究の仮説	(2)	2 学びの自覚を促す授業の実際 (7)
IV	研究についての基本的な考え方	(2)	3 「書くこと」での学びを確かめたり 生かしたりする場 (9)
1	自ら学びをつなげることとは	(2)	4 自ら学びをつなげることができた 児童の姿 (10)
2	「書くこと」と〔知識及び技能〕の 指導事項を相互に関連させることに ついて	(2)	5 授業づくりに対する指導者の意識 の変容 (11)
3	年間を見通した単元の位置付け	(2)	VII 研究のまとめと今後の課題 (12)
4	学びの自覚を促す授業づくり	(3)	1 研究のまとめ (12)
V	研究の進め方	(4)	2 今後の課題 (12)
1	研究の方法	(4)	文 献
2	研究の経過	(5)	



【課題】	
児童	指導者
<ul style="list-style-type: none"> 文や文章の中で、漢字や語句の意味を考えながら正しく使うこと 目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書くこと 【平成31年度全国学力・学習状況調査 滋賀県】	<ul style="list-style-type: none"> 単元間の学びや学年間の学びをつなぐことを意識した単元構想 【令和元年度研究員派遣による学校支援に関する研究(国語科)】

研究員派遣による学校支援に関する研究(国語科)

自ら学びをつなげることができる児童の姿を目指す
小学校国語科の授業づくり

－「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項を相互に関連させた指導の工夫－

I 主 題 設 定 の 理 由

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編(以下、学習指導要領解説という。)には、「全国学力・学習状況調査等の結果によると、小学校では、文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること、目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることなどに課題があることが明らかになっている」¹⁾とある。こうした課題を踏まえて、小学校学習指導要領(平成29年告示)(以下、学習指導要領という。)では、国語科において内容の構成が改善されており、〔知識及び技能〕の各指導事項は、〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項との関連を図りながら指導することを基本とすると示された。

一方、本県においては、平成31年度全国学力・学習状況調査で、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」についての問題の正答率が48.4%、「書くこと」についての問題の正答率が53.3%であり、文や文章の中で、漢字や語句の意味を考えながら正しく使うことや、目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書くことに課題があるといえる。

このような状況の中で、当センターでは、令和元年度研究員派遣による学校支援に関する研究(国語科)において、目的に応じて「書くこと」の資質・能力の育成を目指し、「情報の扱い方に関する事項」と「書くこと」を相互に関連させた授業づくりに取り組んだ。そして、指導者が指導の意図を明確にして、児童の思考の流れに沿った単元構成をし、学習過程に即した評価を位置付けることによって、「書くこと」の資質・能力の育成につながることが分かった。しかし、「書くこと」の領域の学習において、単元間の学びや学年間の学びをつなぐことを意識した単元構想に課題が残り、児童が既習の事柄を想起したり活用したりしながら学習課題を解決していくには至らなかった。

これらのことから、児童が、国語科の〔知識及び技能〕の内容について学んだことを、〔思考力、判断力、表現力等〕の一つである「書くこと」の学習の中で活用するなど、学びをつなぐ単元構想が必要であると考えた。

そこで、本研究では、指導者が年間を見通して単元の位置付けを明確にするとともに、「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項を相互に関連させた指導を工夫し、児童が学んだことを他の単元においても活用できる授業づくりに取り組むことで、学びを自覚し、自ら学びをつなげることができる児童の姿を目指したい。

II 研 究 の 目 標

年間を見通して単元の位置付けや育成を目指す資質・能力を明確にし、「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項との相互の関連を図り、児童が学んだことを他の単元においても活用できるように指導を工夫することで、児童が学びを自覚し、自ら学びをつなげることができる授業づくりに取り組む。

Ⅲ 研究の仮説

年間を見通して単元の位置付けや育成を目指す資質・能力を明確にし、「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項を相互に関連させ、児童が学んだことを他の単元においても活用できるように指導を工夫する。このような授業づくりに取り組むことにより、児童は学びを自覚し、自ら学びをつなげることができるようになるであろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 自ら学びをつなげることとは

本研究では、自ら学びをつなげることとは、「児童が、既習の事柄を想起したり活用したりしながら、新たな学習課題を解決していくこと」と捉える。学習課題を解決するにあたり、これまでの学習や当該単元の学習の中で、学びを自覚することが重要であると考えます。

2 「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項を相互に関連させることについて

学習指導要領において、国語科の内容は、〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕で構成されている。〔知識及び技能〕の内容は、「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」「(2) 情報の扱い方に関する事項」「(3) 我が国の言語文化に関する事項」から構成されている。また、〔思考力、判断力、表現力等〕の内容は、「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の3領域の構成となっている。学習指導要領解説には、「〔知識及び技能〕に示されている言葉の特徴や使い方などの『知識及び技能』は、個別的事実的な知識や一定の手順のこののみを指しているのではない。国語で理解したり表現したりする様々な場面の中で生きて働く『知識及び技能』として身に付けるために、思考・判断し表現することを通じて育成を図ることが求められるなど、『知識及び技能』と『思考力、判断力、表現力等』は、相互に関連し合いながら育成される必要がある¹⁾と示されている。また、「国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、資質・能力の定着を図ることを基本としている¹⁾とある。

そこで、本研究では、〔知識及び技能〕の指導事項を、〔思考力、判断力、表現力等〕の内容の一つである「書くこと」の領域の学習の中で扱うことを、相互に関連させることと捉え(図1)、児童が学んだことを確かめたり生かしたりできる場を、「書くこと」の単元の中や他の単元に意図的に設定し、資質・能力の確実な定着を図る。

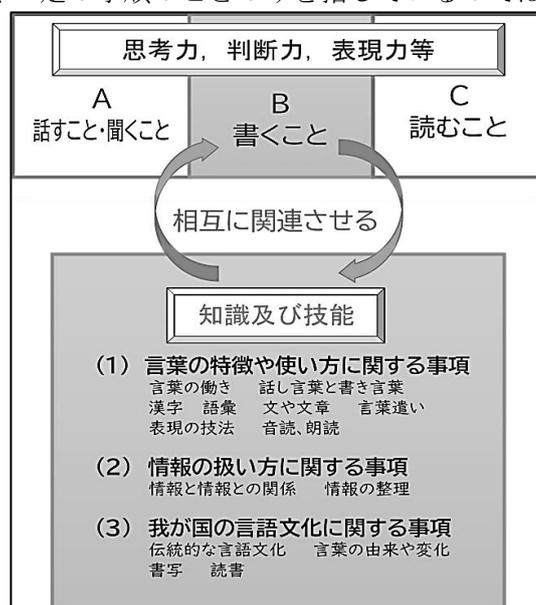


図1 国語科の内容の構成を基にした「書くこと」と〔知識及び技能〕の相互の関連イメージ

3 年間を見通した単元の位置付け

単元を構想するにあたり、当該単元で育成を目指す資質・能力を明確にする必要がある。そのために、まず、年間を見通して、当該単元での重点とする指導事項、前後の単元および前後の学年とのつながりを踏まえた位置付けを把握し、当該単元で育成を目指す資質・能力を明確にする。次に、文章を書くために必要となる〔知識及び技能〕の指導事項との関連を図る。その際、当センターの平成30

か」といった視点を重視し、児童自身が学習課題の解決を図り、次の学習に向かうことができるように、自己評価や相互評価を用いる。児童による自己評価および相互評価については、次のようにする。

ア 自己評価

まず、単元の導入時に、当該単元における自分のめあてを個々に設定する。その際、指導者は、児童の実態や育成を目指す資質・能力に応じて、学習することや言語活動を具体的に示して、児童が適切なめあてを設定できるようにする。そうすることで、単元を通して、自分のめあてに照らし合わせて学習状況を自己評価することができるようにする。

単元の終末時には、学級全体で、学んだ知識や技能、方法などを整理し、単元を通して分かったことやできるようになったことを振り返る。児童が当該単元で身に付けたことを生かしたいとき・ところを具体的に思い描くことで、自ら学びをつないでいこうとする態度が育つと考える。なお、令和元年度研究員派遣による学校支援に関する研究(国語科)の成果物である「学びの足あとシート」を、本単元における自分のめあてを記入できるように改編し、自己評価に用いる(図5)。

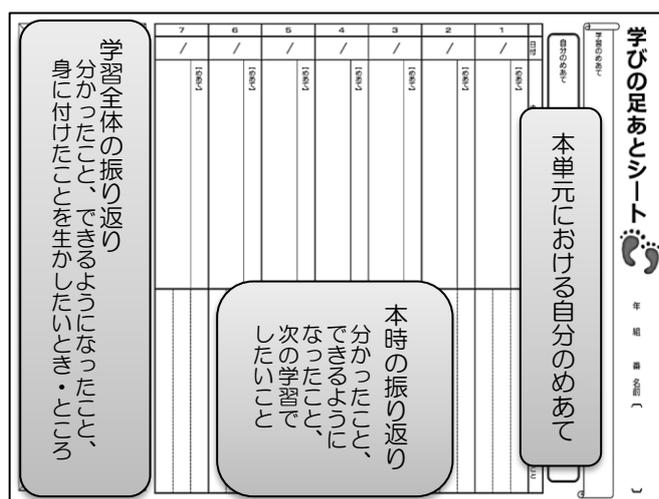


図5 改編した「学びの足あとシート」

イ 相互評価

単元および一単位時間における学習過程において、相互評価を取り入れる。評価の観点については、児童の実態や重点とする指導事項に応じて設定する。学級全体で共有した観点に沿って、他者の文章を読んだり他者とのやり取りをしたりすることを通して相互評価を行う。その学びを生かし、当該単元や本時で身に付けるべき資質・能力を理解して学習に取り組むことができる。そして、自分の書いた文章を振り返り、そのよさや課題に気づき、学びを自覚できるようにする。

(2) 学んだことを確かめたり生かしたりする場の設定

「書くこと」の学習において、児童が学んだことを確かめたり生かしたりすることができる場を、単元の中や他の単元に設定する。そのことにより、児童は、繰り返し既習の事柄を想起したり活用したりして、身に付けるべき資質・能力を理解して学習に取り組み、生きて働く「知識及び技能」として確実に身に付けることができる。そして、児童は、身に付けたことを発揮できた喜びを味わい、自身の変容を実感することができると思う。

V 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 研究協力校の国語科における児童および指導者の意識調査から、各校の実態や課題を把握し、本研究の目標に沿って学校支援の内容を設定する。
- (2) 研究協力校の実態を踏まえ、指導者と協働して、年間を見通して単元の位置付けや育成を目指す資質・能力を明確にし、「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項を相互に関連させ、児童が学んだことを他の単元においても活用できるように単元を構想する。

特徴や使い方に関する事項オの指導事項を関連させて扱った(p.5の表2)。

「書くこと」イの指導事項に関して、1学期には、新聞を書くことを通して、「書く内容の中心を明確にすること」や「内容のまとまりで段落をつくって、文章の構成を考えること」ができるようになった。2学期は、物語を書くことで、1学期に学んだことを生かすとともに、「段落相互の関係に注意して、文章の構成を考えること」ができるように単元を構想した。

単元の目標は、「山場で起こる変化が分かるように、物語の組み立てを考えること」とし、「山場とのつながりを意識した構成で、読み手に伝わるように書くこと」を目指した。児童は、本単元の直前の単元で、修飾と被修飾の関係および「修飾語が入ることで、伝えたい内容をより詳しく表すことができるようになる」ということについて理解している。そこで、本単元では、

〔知識及び技能〕(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項オの指導事項の「言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすること」ができるように、修飾語を用いて山場のある物語を書くことを言語活動として位置付けた。そして、書き上げた物語を、下学年の児童に、本、紙芝居、ペープサートで紹介することにし、表3に示す計画で指導を行った。

児童は、第3学年で経験した、設定を考えて物語を書くことを想起、活用し、第2時では、時・場・人物の設定を考えて「登場人物カード」にまとめた。

第3時では、第4学年1学期の「読むこと」の単元で学んだ「物語の山場を捉えること」や、1学期の「書くこと」の単元「みんなで協力して新聞を作ろう」で学んだ「書く内容の中心を明確にすること」「内容のまとまりで段落をつくること」に関する事柄について全体で確認した。そして、物語の構成を考えて「組み立てメモ」を作成した。

第5時では、物語の「始まり」の部分で推敲する学習を行った。学習の初めに、指導者は、児童が既習の事柄を想起したり活用したりできるように、1学期の「書くこと」の単元「みんなで協力して新聞を作ろう」でまとめた「花丸作文名人への道」(図7)を示した。ここにまとめられていることは、5ページの表1に示す〔知識及び技能〕(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項ウの指導事項に関する事柄や、第1学年および第2学年の指導事項に関

表3 「売れ筋ランキング上位! 3分後に〇〇するストーリー」の学習計画(全12時間)

時	学習活動	指導事項
1	学習の見通しをもち、自分のめあてを決める。	「書くこと」ア
2	登場人物カードを作る。	「書くこと」ア、イ
3	組み立てメモを作る。	「書くこと」イ
4	「始まり」を詳しく書く。	「書くこと」イ 〔知識及び技能〕オ
5	みんなで協力して直す。	「書くこと」イ 〔知識及び技能〕ウ
6	「山場に向かう場面」を詳しく書く。	「書くこと」イ、オ 〔知識及び技能〕オ
7	「山場」を詳しく書く。	「書くこと」イ 〔知識及び技能〕オ
8	「終わり」を詳しく書く。	「書くこと」イ、オ 〔知識及び技能〕オ
9	清書をする。	〔知識及び技能〕ウ、オ
10	下学年に紹介する準備をする。	
11	下学年に紹介する。	
12	学習を振り返る。	「書くこと」イ、オ 〔知識及び技能〕オ

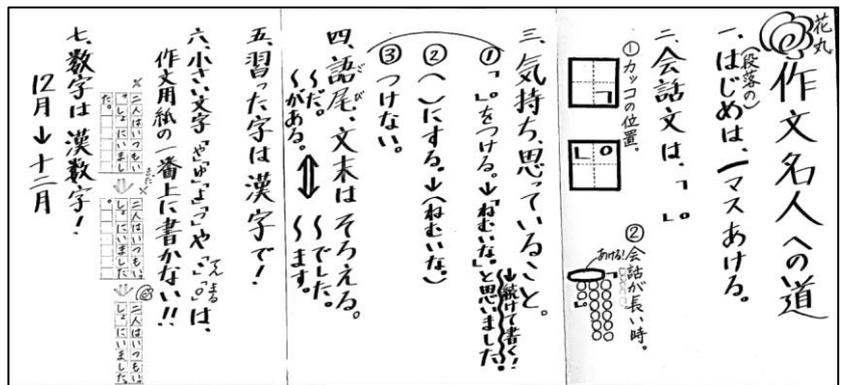


図7 既習の事柄をまとめた学びをつなぐ掲示物「花丸作文名人への道」

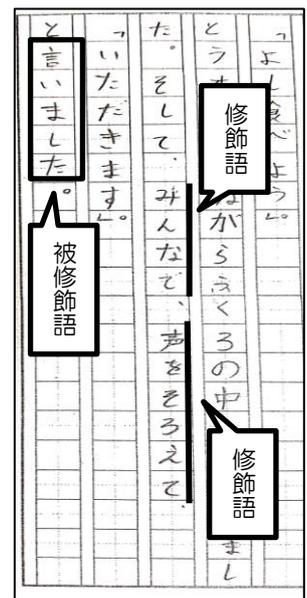


図8 児童Aが書いた文章の一部(枠線、傍線は、筆者)

する事柄である。児童は、1学期の「書くこと」の単元「みんなで協力して新聞を作ろう」で推敲をした学習を想起して、それぞれの事柄について確かめながら自分や他者の文章を読んだ。児童は、第6時の学習以降も、文章を書いたり他者と推敲したりする際にこの掲示物を活用していた。

また、6ページの図8のように、児童は第6時の学習を通して、組み立てメモを基に修飾語を用いて物語の「山場へ向かう場面」を詳しく書くことができた。この時間の振り返りには、「修飾語を使ったら、場面の様子がイメージしやすくなると分かった」等の記述が見られ、修飾語を使うことのよさに気付いていることがうかがえた。

このように、指導者が「書くこと」イの指導事項と〔知識及び技能〕(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項ウ、オの指導事項について繰り返し学習する単元を構想したことで、児童は既習の事柄を想起したり活用したりして、新たな学習課題に取り組むことができた。

2 学びの自覚を促す授業の実際

(1) 自己評価を用いて、学びの自覚を促す

第3学年2学期の単元「聞いて、聞いて、ぼく・わたしの考え」(教材名「自分の考えをつたえよう」東京書籍)では、「書くこと」ウの指導事項を重点とし、〔知識及び技能〕(2) 情報の扱い方に関する事項アの指導事項を関連させて扱った(表4)。

重点とする指導事項を基に、「読み手に伝わるように、自分の考えとそれを支える理由を明らかにして文章を書くこと」を単元の目標とした。そして、「『始め・中・終わり』かつ双括型の構成で書くこと」や「理由や事例を整理して書くこと」を目指し、題材を変えつつ、同じ手順や方法で意見を繰り返し書く活動を設定した。

単元の導入時には、直前の単元である「話すこと・聞くこと」の学習を想起し、自分の考えを伝えるためには、複数のものを比較して検討することや理由を明確にすることが大切であったことを学級全体で振り返った。また、指導者が「全校のみんなに意見文を読んでもらおう」という学習活動を示すことで、児童は、「投票してくれる人(読み手)に、『なるほど!』と思われる意見文を書こう」などと、相手意識や目的意識をもった自分のめあてを立てることができた。

表4 第3学年「聞いて、聞いて、ぼく・わたしの考え」で扱う重点とする指導事項

「書くこと」	ウ 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること。
〔知識及び技能〕(2)情報の扱い方に関する事項	ア 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること。

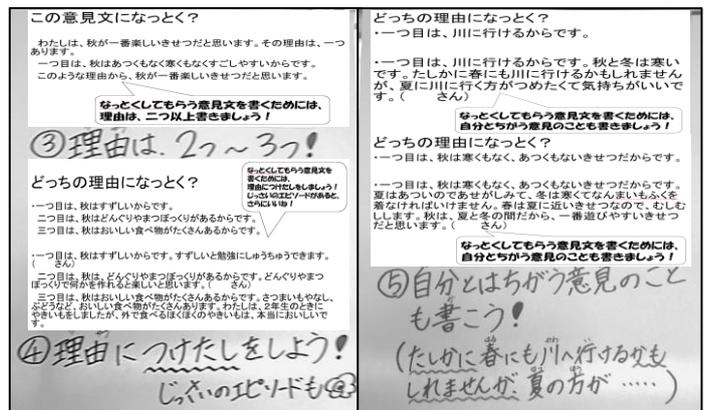


図9 意見文の書き方についての学びをまとめた掲示物

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9
9/14	9/15	9/16	9/17	9/18	9/19	9/20	9/21	9/22	9/23
意見文を書く									
...

単元全体の振り返り

学びの足あとシート

自分のめあて

図10 児童Bの「学びの足あとシート」(枠線、傍線は筆者)

その後の学習で、児童は、「『始め・中・終わり』の構成とし、『始め』と『終わり』に自分の考えを書く」「納得してもらいたい意見文を書くためには、理由は二つ以上書いた方がよい」など、学びを積み重ねていった。指導者は、これらの学びをその都度、7ページの図9に示す掲示物にまとめ、共有できるようにした。児童は、毎時間それらを確認しながら意見文を書いたり、書いたものを読み合ったりした。

毎時間の終末には、7ページの図10に示す「学びの足あとシート」で自らの学びを確認した。「一番言いたい理由を最後にもってきて、相手が納得する意見文が書けた」「理由だけでなく、エピソードも入れることができた」等の記述があり、自身の書く力の高まりを実感していることがうかがえた。また、「次は、違う意見のことも入れて、相手を納得させたい」と、学びをつなげようとする記述も見られた。

このように、自己評価を繰り返し行うことで、児童は、毎時間の学びを自覚したり、既習の事柄を想起、活用したりして、よりよいものを書こうとした。そして、図11に示す意見文のように「始め・中・終わり」かつ双括型の構成で、理由や事例を整理して書くことができるようになった。また、単元全体の振り返りにも、「意見文が書けたから、話す時も詳しい理由を言えそう」という学びをつなげようとする児童の姿が見られた(p.7の図10)。

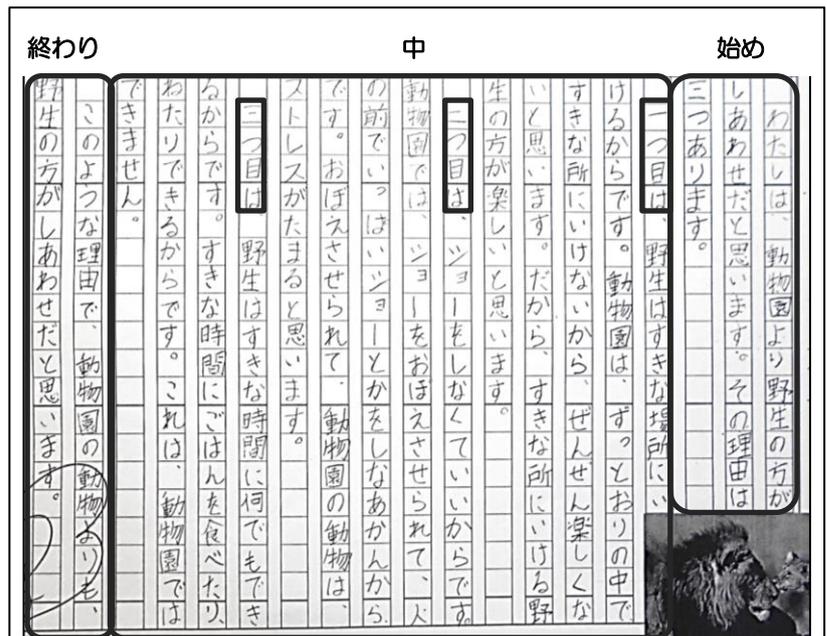


図11 児童Cが書いた意見文(枠線は筆者)

(2) 相互評価を用いて、学びの自覚を促す

1学期に課題が見られた指導事項を、2学期に繰り返して扱うことで成果があった事例を示す。

第5学年は、1学期の単元「あつと驚く報告書を書こう」(教材名「みんなが過ごしやすい町へ」光村図書)、2学期の単元「グラフや表を用いて書こう」(教材名「グラフや表を用いて書こう」光村図書)とともに、「書くこと」エの指導事項を重点とし、〔知識及び技能〕(1)言葉の特徴や使い方に関する事項力の指導事項と、(2)情報の扱い方に関する事項イの指導事項を関連させて扱った(表5)。

第5学年1学期の単元「あつと驚く報告書を書こう」では、「目的に応じて引用をし、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」を単元の目標とし、写真や絵などの資料を使ったり本や記事から文章を引用したりしながら根拠を示して、校長先生に向けて報告文を書いた。題材を決めて、目的に応じて情報を収集することはできたが、引用が文章の書き抜きに過ぎなかったり、自分の伝えたいことと引用したことが合致していなかったりする児童がいた。

表5 第5学年「あつと驚く報告書を書こう」「グラフや表を用いて書こう」で扱う重点とする指導事項

「書くこと」	エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。
【知識及び技能】(1)言葉の特徴や使い方に関する事項	カ 文の中での語句の係り方や語順、文と文との接続の関係、話や文章の構成や展開、話や文章の種類とその特徴について理解すること。
【知識及び技能】(2)情報の扱い方に関する事項	イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。

そこで、2学期の単元「グラフや表を用いて書こう」についても、1学期の単元「あっと驚く報告書を書こう」と同様に、8ページの表5に示す指導事項を関連させて扱った。そして、「図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」を単元の目標とした。また、「自分の考えを裏付ける資料を選ぶこと」「資料と文章を対応させて書くこと」「資料から分かることと自分の考えを分けて書くこと」を目指して、題材に対する立場を決めて意見文を書き、第6学年の児童に読んでもらうことにした。



図12 観点に沿って相互評価をする児童の様子

事前の児童および指導者への質問紙や聞き取りから、「書くこと」の学習では、指導者が児童と個別に関わって文章を完成させたり、学習過程の共有の段階までは個人で活動をさせたりすることが多いことが分かった。そこで、他者とのやり取りを通して、当該単元や本時で児童が身に付けるべき資質・能力を理解して学習に取り組むことができるように、文章を書き上げた段階のみならず、全ての学習過程で相互評価を取り入れた単元の展開とした。そして、単元の導入時から、一貫して「自分の考えと統計資料の整合性について確かめること」について評価をするように促した。また、単元構想に沿って、「主張に合った資料を選ぶことができるか」「資料と文章を対応させて書くことができるか」「注目する言葉や数字を示しているか」「資料から分かることと、自分が考えたことを分けて書くことができるか」など、具体的に評価の観点を絞って相互評価を行った(図12)。このような相互評価を用いることにより、図13のような学びの自覚につながった。

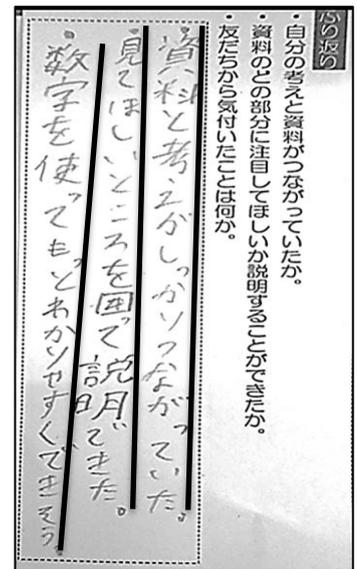


図13 相互評価を終えての児童Dの振り返り(傍線は筆者)

単元の終末には、学びの自覚を促すために、1学期に書いた報告書を再度読み返す活動を取り入れた。すると、児童は、「1学期の報告書は文章を写していただけだが、今回は、必要な言葉を選んで書くことができた」「自分の考えに説得力をもたせるためには、専門家やそのことにくわしい人の意見を引用したり、信頼できるところが発表しているデータを使ったりして書くとよいのだ」「意見文や報告文を書く時に、資料を使いたいなら相手にも分かるような資料を使うことが大切だと思った」などと振り返っていた。このことから、児童は、引用したり表やグラフを用いたりする意義に気付いたり、自分の考えの根拠となる文章や統計資料を用いて書くと説得力が増すということを理解したりしていることが分かった。また、文章を引用したり統計資料を用いたりする際には、自分の考えとそれを裏付ける資料等との整合性を確かめることが大切であることに気付いていることがうかがえた。

このように、児童の実態や指導のねらいに応じて複数の単元で同一の指導事項を重点的に扱い、螺旋的・反復的に学習し、活用する場を設定することを通して、児童は身に付けるべき資質・能力を理解して学習に取り組むことができた。さらに、観点を絞って相互評価を行ったことで、学びを自覚し、学んだことを次の学習で活用しようとする児童の姿へつなげることができた。

3 「書くこと」での学びを確かめたり生かしたりする場

第6学年1学期の単元「ちょっと聞いて！12才の主張」では、「具体例や引用などと、自分の考えを区別して書くこと」「異なる立場からの反論を想定し、それに対する考えを入れて書くこと」を目

また、自分の自主学習ノートのページの上部に、学習内容に関する見出しを書く児童が増えた(p. 10の図15)。指導者が書き方を示したのではなく、児童が見出しのよさを実感し、進んで使っていることから、自ら学びをつなげているといえる。

2学期には、社会見学のことを題材に新聞を書いた(p. 10の図16)。その際、「(読み手に)読みたいなどと思ってもらえる見出しを付けるとよい」などとつぶやいて、既習の事柄を活用し、見出しを工夫して書く児童もいた。また、児童が互いに、「この見出し、どう思う」「内容に合った見出しだね」と指摘し合い、「書くこと」の学習で学んだことを生かして書き進めている様子が見られた。

(2) 児童の意識の変容

図17は、研究協力校の児童を対象として実施した質問紙調査の結果である。「国語科の授業で学んだ文章の書き方を、他の単元の学習で使っている」について、肯定的に回答した児童の割合は、68%から84%に増加した。

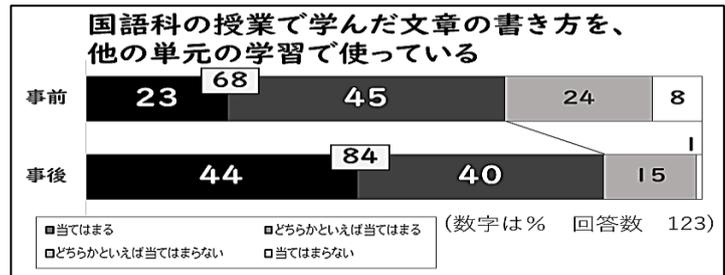


図17 質問紙調査結果の比較

図18の児童の振り返りからは、児童が身に付けるべき資質・能力を理解して学習に取り組むとともに、それらを相手、目的や意図に応じて活用していることがうかがえる。これらのことから、児童が既習の事柄を想起したり活用したりしながら新たな学習課題を解決していることが分かる。

学びの 自覚	<ul style="list-style-type: none"> 具体例を入れて書くことができるようになった。 文章の構成を考えて、割り付けができるようになった。 修飾語を使ってわかりやすく書けるようになった。
学びを つなげる	<ul style="list-style-type: none"> 表やグラフを引用するなど、今まで習ったことを使うようにしている。 習った漢字や学んだことを使って書いている。 国語で習ったことを使って日記を書いている。

図18 児童の振り返りの一部

図19は、指導者が感じる児童の意識の変容である。これらの記述から、指導者も児童の意識の変容を実感していることが分かる。

学びの 自覚	<ul style="list-style-type: none"> 様々な学習場面で、学習課題の解決に向けて自分のめあてを立てて取り組んだり振り返ったりする姿が見られるようになった。 「自分は書ける」と自信をもっている児童が多かったが、できていないところがあることに気づき、どうすればできるようになるか考えられるようになった。
学びを つなげる	<ul style="list-style-type: none"> 学んだことを生かし、自分の考えを整理して書いたり、表現を工夫して書こうとしたりする児童が増えた。 相互評価において、以前は感想を伝えるだけであったが、読み手を意識した構成や表現の工夫を見付けて、助言したり称賛したりできるようになった。

図19 指導者が感じる児童の意識の変容(一部)

5 授業づくりに対する指導者の意識の変容

指導者に、これまでの取組を振り返って気付いたことを尋ねた(図20)。

<ul style="list-style-type: none"> 「この単元ではこれができるようになればよい」とねらいを絞ると、指導も評価もわかりやすくなる。 得た知識や技能を、他教科の学習で活用できる力を付けることができる授業づくりが大切である。 年間を見通した単元の位置付けや目指す資質・能力を明確にすることで、「書くこと」だけでなく、「話すこと・聞くこと」や「読むこと」の単元で、どのような活動を仕組むと効果的な指導が可能になるかということを考えるようになった。 指導事項の確実な定着を図るために、単元で学んだことを生かす場を意図的に仕組むことが大切だと感じた。 意図的に活用する場を設定することが、子どもの力を伸ばしていくうえでたいへん有効であり、大切なことであると感じた。 「学びの足あとシート」を中心において、児童が自ら主体的に単元を歩いていくような学び方が、生きた学力につながると感じた。 取組を通して、児童らを信じて、児童らに任せることも必要だと感じた。評価の観点を示して、児童らによる相互評価を行うことにより、指導事項に関する児童らの理解が深まった。 既習事項が定着するように、螺旋的・反復的に指導する必要がある。児童の実態に応じて、単元に仕組みたい。 【知識及び技能】の指導事項は、それらを取り立てて指導することも必要だが、「書くこと」と関連させることにより、使える知識や技能になることを感じた。

図20 指導者の感想の一部(下線は筆者)

指導者は、単元を当該単元のみで考えるのではなく、単元間の学びや学年間の学びをつなぐことを意識して単元を構想することができたことがうかがえる。

また、「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項を相互に関連させて指導することや、児童が既習の事柄を想起したり活用したりできる場を意図的に設定することで、それぞれの指導事項が生きて働く「知識及び技能」として児童に身に付くことを実感したことがうかがえる。

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 年間を見通して単元の位置付けや育成を目指す資質・能力を明確にし、「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項を相互に関連させたことにより、単元間や学年間の学びをつなぐ単元構想をすることができた。
- (2) 学びの自覚を促す授業づくりに取り組んだことにより、児童は、「書くこと」の学習を通して「知識及び技能」を確実に身に付けるとともに、学びを自覚し、既習の事柄を想起したり活用したりして、自ら学びをつなげることができた。

2 今後の課題

- (1) 〔知識及び技能〕の各指導事項を基軸とし、国語科の領域間や他の教科等とのつながりを意識した単元構想や授業づくりを検討する必要がある。
- (2) 低学年における「書くこと」と〔知識及び技能〕の指導事項の確実な定着を図る効果的な指導のあり方を検討する必要がある。

文 献

1) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編」、平成30年(2018年)

滋賀県総合教育センター「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する小学校国語科の授業づくり」、平成31年(2019年)

滋賀県総合教育センター「目的に応じて『書くこと』ができる児童の姿を目指す小学校国語科の授業づくり」、令和2年(2020年)

研 究 協 力 校

甲賀市立土山小学校

日野町立必佐小学校

研 究 協 力 員

甲賀市立土山小学校

日野町立必佐小学校

堤 基也

岩田明日香

志賀 亮治

瀬戸山 茜

岩本 衣里